

副島隆彦著「英語国民の頭の中の研究—なぜ日本人はコトバの壁を越えられないのか—」PHP 研究所 2014年9月30日刊を読む

なぜ日本人はコトバの壁を越えられないのか

1. 英語のしくみを理解しなければ日本人にとって英語は永遠の謎だ

- (1) これまでの実用英語の本は、英会話の能力を伸ばすことを目的として書かれてきた。
- (2) その多くは、基本的には英文法を無視して、なるべく日常の生活に必要な英語の慣用的な表現と例文に慣れ親しむことが目的とされた。それが日本人が英語を上達する最上の方法であるという観点から書かれてきた。
- (3) 私たち日本人の多くは、高校生時代の英文法の授業でやたらとむずかしい文法事項を習わされたので、いきおい英文法にもイヤ気がさしている。
- (4) だから、もう英語の試験を受けなくてもよい年齢に達すると、すぐさま「英会話」に飛びついて、新鮮な感じで英語をやり直そうとする。それは無理ならぬことである。
- (5) だが、その英会話にしても、多くの人はある程度までいくと、ある壁にぶつかって立往生してしまう。
- (6) その壁は、いったいどういう壁なのか。私たち日本人の英語下手がいつこうに改善されないのは、なぜなのか。これが私がこの本を書いた動機である。
- (7) 慣用的なパターン例文を、くりかえし暗唱し、それを対話形式に直した例文にして覚えようという従来のやり方だけが今も切実に生き残っている。

2. どうしようもなく分厚いコトバの壁

- (1) 日本語と英語(あるいは広くヨーロッパ語)は、文字と発声はつせいを含めてそもそもの言語構造が異なっている。
- (2) だから、その異質さを、明確に浮き彫りにし、コトバとしての相違点をきちんと整理し直す作業からやり直すべきだというのが私の立場である。
- (3) 一つの民族の言語を支えているのは、もとよりその国の国民の長い歴史時間のなかではぐくまれてきた“民族文化”である。
ナショナルカルチャー
- (4) それぞれの国がそれぞれの文化を独自に形成してきたがゆえに、文化のちがいはそのまま大きな言葉の壁となって私たちの前に立ちはだかっている。国民文化のちがいの最大のものが、まさしく言語(コトバ)である。コトバの壁だけは、いまだにどうしようもなく分厚い。
- (5) 大学教育を受けた人々にとっても、それなりの英語を「読み」、「話し」、「書き」、「聞く」ことは至難の業である。

3. 日本文法と英文法の「ちがい」に敏感になろう

- (1) 私はコトバのしくみのちがいという観点、すなわち、コトバの規則性の同じ点と、くいちがっている点を見つめ直すという地点に踏みとどまって、この問題を考え続けた。
- (2) 私たちが習った英文法の理論を再度検討し直して、日本人の身の丈に合った、日本語の理屈に合う英文法というものをつくり出すことができるのではないかと考えた。
- (3) 英語学習に関する各種の教材は、街の書店にあふれている。しかし、CD や DVD の教材は、日本語のしくみ、つまり日本文法と英文法のどこがどうちがっているのか、という観点を踏まえていない。
- (4) 日本語という、外側(外国)から見たら非常に奇妙なコトバを母国語としている私たち日本人にとって、英文法といわれてきたものが、じつは英語をしゃべっている人たちのための文法であった、ということに気づくべきだ。
- (5) そして、一方、日本国文法とされているものも、日本人にだけわかりやすい理論に過ぎない。外国人にとっては「五段活用」とか「助動詞の用法」などは至難の業だ、ということにも思いいたる必要がある。日本人が英語を学習する際に心がけるべきことは、この点にある。
- (6) 英語を母国語とする人々のことを「英語国民」と言う。このように決めてこの言葉を使い始めたのは、私である。今ではこのコトバが定着した。イギリス人、アメリカ人だけが英語国民(ネイティブ・イングリッシュ・スピーカー)ではない。
- (7) 私は、native English speaker を英語国民と呼ぶことにした。誰もが知っているとおり、えいれんぽうコモンウェルス(英連邦)の国々(南アフリカ、オーストラリア、カナダ)も英語国家である。それだけではなくだいえいていこく旧大英帝国(the Commonwealth of the Nations)の植民地は、英語が公用語である。香港やシンガポール、インドなどでは英語は共通言語になっている。
- (8) 今日では、世界中のあらゆる地域で、さまざまの人種が英語で意思疎通している。だから私は英語を日常で使用する人びとまでを含めて英語国民と呼ぶことにした。
- (9) 英語が白人だけのものではないことは、明白である。にもかかわらず、これまでの英語教育では上品な白人の典型的な英語(の表現と、語り口)だけが英語の模範とされてきた。
- (10) ごくふつうの人々のごく一般的な英語は、もっと私たちの耳に優しい気がする。もちろん、粗野で下品な英語のしゃべり方を真似すべきではない。私が望むのは、世界語としての英語の、簡明で適切な語り口である。
- (11) 英語国民と日本人の発想のちがいといわれるものも、つきつめると文章の構造のちがいに行きつく。
- (12) コトバのちがいは文化、生活習慣のちがいをひきずるから仕方がないと諦めてはならない。日本語と英語が両方の文のつくり方のどこがどのようにちがうかを考え、かつ共通の土台を作るべきだ。
- (13) この本では英文法を解剖する作業を詳細に行なった。
- (14) この本の着眼点である「日本文法との対比から見た英文法理論の再検討」という企てに私は着手した。
- (15) 私が独力で築き上げてきたこの方法が、これから先、日本人が英語に近づく際の最良の道になってほしい。そしてより多くの賛同者を得ることを念願している。

(16)ただでさえ下手くそな日本人の英語発声を少しでも上達させ、世界市民としてふさわしい英語がしゃべれるようになることが私たちの目標だ。発音(発声)についても、従来のフォネティクス音声学の立場とはちがう視点から、私の意見を書いた。

P236 ~ P239

[コメント]

大ベストセラー、「属国・日本人論」(五月書房刊)で日米関係のあり方、日本のあり方を世に問うた副島先生は、英語の大家でもある。本書は、名著「英文法の謎を解く(上、中、下)」(ちくま新書)の入門書とも言える。本書を読了後、「英文法の謎を読む」に挑戦、たしかな英語力を身に着けることをお勧めしたい。

— 2014年10月12日 林 明夫記 —